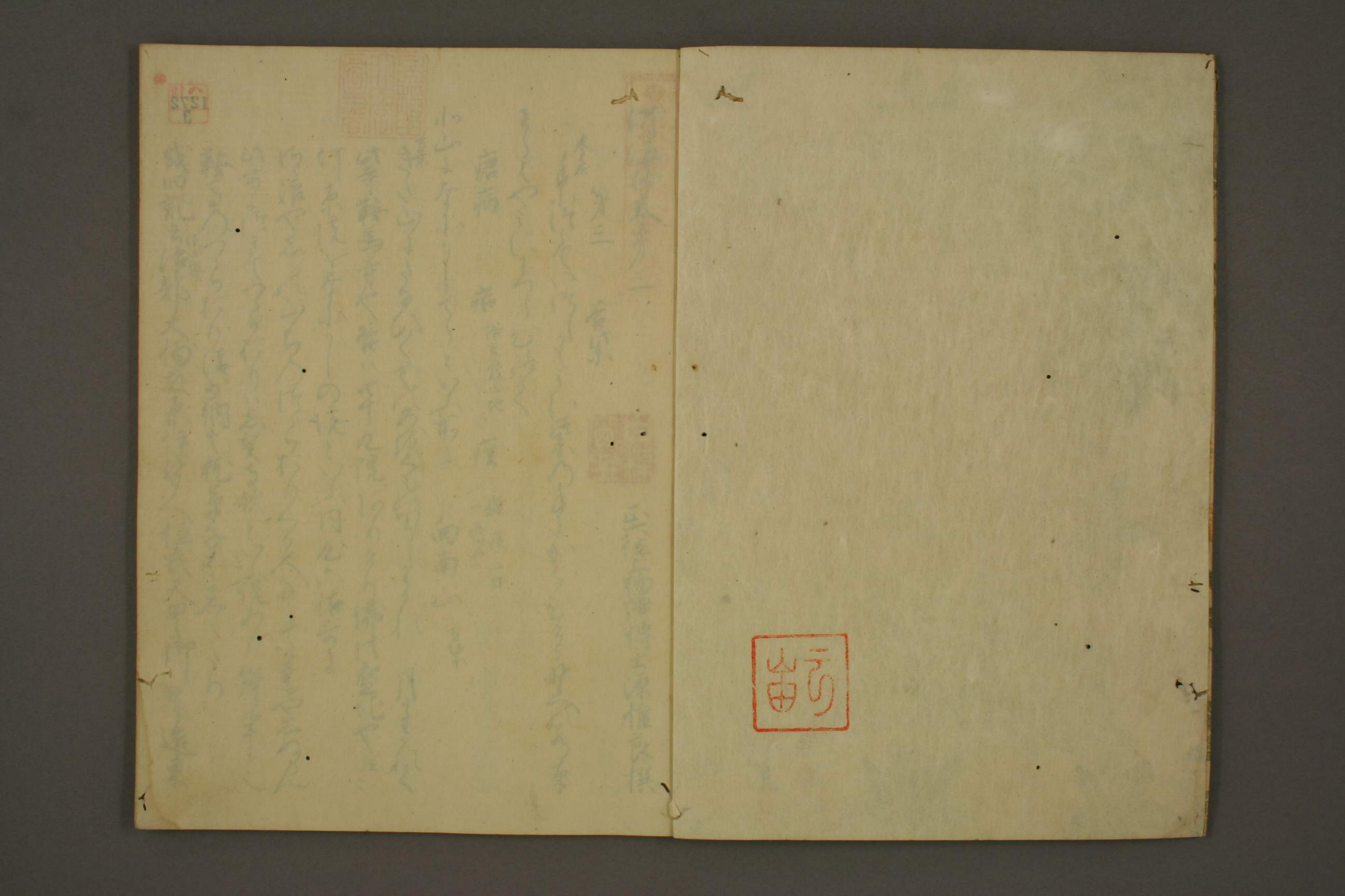
河海抄

若紫
末摘花

三

へ刊12
1272
3



河海抄巻第三

正六位上物語博士源惟良撰

第三　若紫

奥入
手につみていつしかもみむ紫のねにかよひける野への若草

わらはやみにわつらひ給て

瘧病　瘧 俗云發心地　瘧 一瘧 瘧二日一發也

向南山 万葉

北山になむなにかしてらといふ所に

万葉
きたやまにたなひくくものあをくものほしはなれゆき月をはなれて

此寺鞍馬寺也 若ハ峯九院にかゝる佛法霊地也云々

河原院となにかしの院といふ同名ハ作云よ

何ハや志乃山ちのつゝらをりたる人ゝそまさりてこえん

此説よ何ことてつゝらをりハ志賀寺歟と云説あり 僻事也

鞍馬のつゝらをり清少納言枕草子ホよみえたり

或旧記云治部大輔 從四位下 藤原伊勢人桓武天皇御宇造東

特 へ12 1272 3

寺行幸間不絶開ル花鴨河原故実為行幸小山
寺洛西嵯峨門天始建立ル寺ニ
水境ニ延暦十五年藤原朝臣
行ふくはるかなりやすらひ
ちるこのかはのいなうしてはの
為愛　世俗よ志ろのるすとやうはる公欲
先ふ法ろうふるよたいうまりてひろれとかてゆるとと
やうれく　老　白氏文集　老屈
赤鼠院悩痢疾ら御時石天台座主慈恵僧正奏老病ニ
術ら中不未来三ら後法石来人なか祈即滅ニ
三月ニこうるまさは
やうひとしし
赤花さういみるうふるうふく

原の花に咲ひけみうとのふうさていまさ望ひ赤人
里いみるるぬくそ和と吳哉の山ていまさ法ふるる能恒
ひうるを花ひ咲ふくひうきふしこ和ぬとうや
和ふさいうのなるふそ和ひうる
奉ん和ふいうの中ふ海ふ寺はよりうき寺人ふ歩ふ法ん
佛才子頂菩提住西天石窟
足ハ竟ニ陳思王遊漢山忽関慶裏有誦経聲清遠響
使解ニ立日者寫之為神仙ら声道七初ら作歩虚寒山
詩ニ　余家有一窟ニ中ニ一物
臨方　修羅
きしうふうはこないも　一
うくさんはうくくくはる
特とうせのまうる世俗よ
なこうはうはれしふ

盤折　通巌巓　白氏文集　隴陂斜九折

清少納言枕草子にちかくてとをきもの　くらまのつゝらをり

きらけなるやおしなき　廻廊　号小僧記見深窓物語

なかし僧都　覚尊僧記

志かの山　門前秋水後秋山　終日蕭々眺望宋　紀納言　長谷雄作

人のくに　他国といふや　異物事よいつゝさ

伊勢物語ニ人のくにゝても猶かゝる事やまさるらん

あしのやふしわけ

大岩釈迦嵩　冨士山を対　せうかう山やこゝ

なかのわたりかさくほはかられと　河曲　又隈

松かさむかなる布を侮り寛いろきと　地窄屋室寛　白氏文集

みちのおほいなるはふかいにつゝぬ物を流のやうなん

香　さいのくにきよらんにしとも　めでたき　新発意は初て入禅の人に

初発心の菩禅に新発意菩薩といふ人をいふとし

いとけなし弟し　行脚痛かりといふ者の

いくとしもたらすかぬ人也

あかやうなともきも住なとゝもへりけるや

今まてはおもしぬるは百敷の宮の桜とみるくや尾をたらん

右信明中将とうてかやすらかにゆききかれと

茨原実　野氏長徳元年正月十三日辞　左中将任陸奥

守即日還岸　さいつ御物一勢

かの国の人わりとつゝしのはかにはて　あれはまてうらし

なかのめはくかくか　西月

とうし奥まれる山をこ深せよく　奥　日本紀

文選ニ　奥字はふかきとよめり　藤雲奥　初ふや　こしとも山かきとふかく

さいはしも　近曾　万葉にとものさいはとひとおり一時のさたと

[illegible] 楓心楓風楓皆見心や
[illegible]
[illegible]
[illegible]

推古天皇十一年十二月戊辰朔壬申始制冠位十二階各有差
十二年春正月戊戌朔始制冠位於諸臣各有差是叙位始也
是故比准八義宜制爵位其孝者天や紫　為一忠者日
也錦冠為二仁者月や繡冠為三悌者星や纐冠為四義
者辰や緋冠為五礼者聖や深緑為六智者賢や浅緑為七信
ゑ神や深纐為八祇ゑ祇や浅纐為九其地ゑ母や黄冠為十月今以後永ゑ恒式
以上元代旧事本記

かゝりの位とい爵と陽やゑ位ゑ爵位ゑ や東記み
なり色一位ゑ初位まで合く九ゑ位ゑ其中 正位上
下とゑい三十階や五位いと 初受て赤ゑ位
位ゑ六位七位い奏受て大位以下あいゑかゝいく
奏ゑゑかり八位初位い別受て奏ゑまて大位
以下おれや初く五位ゑ叙ゑ叙爵ゑ冠ゑ
ゑい三十階のゑゑまゑ色い初ゑ
若い位ゑゑ物代冠ゑ
大織冠ゑい其時ゑ正一位ゑ
二位ゑゑ車い市ゑゑ
車い諸御原天皇御代ゑ
ゑ色かゝゑい ゑ人童や
おゑけケ位人ゑゑて

ほとの国司の事といふなり　雑いまの受領上てう
労とくらへけりふる任用
ちかひもしなり　於佛
いぬき　大云　上東門院の上童なり名になり栄花物語
よみさらりきいみれ家や又お世俗にあねさおいつきなきと
いかあ祢君おいつきことといふなり
内裏女房の　歳に上臈とは何房中下臈といへる也と
かなりや
はねよりてさ御してさいお海しも　事　日本紀 文論語　継 文撰
ととめれこ志てひ候ほとよ流ともりそと
繋髪　元名沙弥戒経
件つきねを(面)ひしいそ孫らすけかく(様)
頼　芳　亮　日本紀　かけくと志すの白や

うちなりいそけかし
折なりいまかい屋の明のかん薫のかをや
禄ひゆし　調行
かとはやくると　巌　文光
おいらしにゆりもしつねてのま美とくなと庭そ法人ありき
稚草　日本紀　とくるといはくくりとあり露と秋かくせるき
まさつをむりし海しなりき　ゐことれおいくし海しなりき
うきにけしく　妻
草の御ししちて
樹下集　そめのきのいそ井此庭にはまきりし草れしなてなやむ心
天台大師の御忌りに慈恵僧正の詠之千僧贊一心也
草庭　草庭　同事也
いなりし　不審

按察大納言　養老三年始　按察使

いにしへのともかうき野をさらしおもひをうるは
かきとは治国庶民のためかきる大臣の職たれは山陵
世の誠をさとさらしてかやま
なかくみさをしらむる　進心　万葉
(あとも)行し庭はすつ人はかくの葉のさやく霜夜とわかひとりね
(秋)秋の野をわけてみる人は花の色をたゝさらにわくくさの
たきのみをさし行く
渉津をみたるもらとは行りてとすわか道の渕瀬はさき
ともの舟しそくは見きかうきみとく
枕草子云ともめ(法の僧の事)帯しそくはやまはいかにありかゝしを
乞ゆくゑ
とふしきをぬく　退や

はやものゝ御法のちかひ久しくきは久しくし
(法花経)従実入於実永不関仏名
ゆきはのりのと　あきくるかなき色秩
ここのちせをいそくゆく　以前の不足しはかのいた人
きのめなすかれいるのかゝつ乞よいふ
法花三昧とこなたよりきんはのため(識)
三昧は梵語なり此云正受文云正見法花識法南岳大師釈
行法門や
さしくこに被のりしるし
行しま見にはうりやうくといふたるに
(法)かかりの桜中の春みやかけよまさしくたきかは激すりゝ
(夫木集)わきさゆしかりとみ
花のもちわきをかなくはひかたくまくほしき庭とみて

六十七　護身

わかこゝろみれつゝ心さゝえ花ハちりあらし

歯落ゆきは都のとくやひとめもいふ遠人の志滴る

よのきゝたる秋

はかれよくらし流れてたゞよふことも浪花ハ梵語や

鉢〻

うかむしを花すちるをらむにくみ山桜ちりめぐる

天台云優曇花三千年一〻則金輪王出云〻

文句云優曇花　新云鄔曇鉢花鉢為瑞應華金輪

王出時水減少金輪路現此花乃生作金輪王之先　又云

而瑞華似蓮華故云疑云此花無曇劫難開辟如〻

者有不以若三千年此花現者何為重瑞乎

答云一義云此花原時〻曆三千年次毎三千年非

云出現

優曇花ハ輪王出世の瑞や故号重瑞花人寿八万歳

時節金輪王遶四州其時海水減ろまはりて此花

が咲ことのふことをいふ御えろまうらへいろ

咲の繩時ありて一とせいもつくなるとちるも

此花の久を時一咲の色し

御まりを小心にたえくさ流る

獨鈷

僧都の世をきて（白毫）そうらむ身の流りものにしつし（金剛子）の

こそれまのさしそくちる

本朝神仙伝（江帥匡房撰）曰上宮太子者明天皇之子也母后妃

夢有一金人曰　誰者胎以弘佛法誕生之後自少小時

聖徳被天下神異遍海内遣小野妹子於唐朝渡之身

持経取他所来太子閑之入定一旦　真経而出吾進遣
魂神而　渡や半日ら間渡万里滄溟後彼山僧
日某日金人乗空来故此経聖衆圍遶雲霧杳冥
畧抄

明天皇御宇聖徳太子六歳冬十月自百済国経論
律師禅師比丘尼以下上妃而献之地上
つらつら　太子金罰子念珠度伽藍
弐之法隆寺小子子御神毎物の中に念珠あ三
連ありその中金罰子念珠一連ありこれ法寺の縁起
おもみてつらつら
[illegible]
つるかつらつらに入く　百某に安利袋ありはたた
つるかつらつらさいえてつら義さきんやつり
ちりおくりつらつ袋いきとつら五音横通れ写や

五某の校につちくらしつらつれつかに御くちりと入く
夫布祢い鞍る寺の法守し鞍る夫布祢の中間に僧
正谷といふ而ありその某姉に佛不動尊霊論の地某師
佛の右御手に袖陽蓋と杖に陽蓋と杖に御僧部遣物に
[illegible]
御法ちり物　贈物
雲衣花袖　羈中贈風樽滿湘浪上船　朗詠
たいりは　向東　在伝度
頭中将とられるのふ[illegible]
可津良支の天良の東江名留やトら良の天良尓
し祭留や江の波井金し良太万し川久やし
良太ホし津久や北久止し止しし干と天波久尓
ソ尤可江元や和伊ア　止表世無や北と久止し元

長こ比こ久ゝ比ゝ　催馬楽
葛城
ちはやぶる　かつらぎかみにいますなるかつらぎかみにいますなるもの

篳篥　玄未摘花　笙　説文曰笙十三簧象鳳之身
笑曰列管以象鳳翼也或曰鳳翼鳳音
介雅曰夫笙謂之簧郭璞曰列管大中施黄端列仙
伝曰王子喬好吹笙作鳳鳴鳳類故通云之古橋笙
詩曰彤管鳴鳳翼聲随無弭風衰
僧都羽試身つゝもちゝく海いりて

琴標曰伏羲　作長三尺六寸六分大象三百六十六　廣
六寸象六合也文上曰池下曰岩池水平前廣後狹象考卑也
上象下方法天地五弦宜也大弦君也寛和而温小弦臣也清
廣不乱文王加二弦合君臣恩也宮為君商為臣角為民徵
為吏羽為物也

琴書曰自堯相伝善琴者八十餘樣雖少有差大體猶
似皆長五尺六寸法春秋数也上象而欲象天也下方相平
法地十三徽配十三律餘一象閏也本五絃宮商角徵羽
也加二弦文武也至後漢蔡邕　又加二絃象九星在人法
九竅清徽原吉野宮ふくゝ日　琴を弾し給ふ
前　のゝ　に　琴を聳て　林女洛て曲をつゝて神と
あくゝ事　又迦天皇　の　給人不見ちくいくく
ゆゝあみゝとゝあさいとゝかゝ海とたゝまゝ海とゝ
めさいとゝ　光五節　盤鶴　や　生し通女奏
仙笙曲上古渡来　ゝ　羽ゝ除白論　ゝ　允恭天皇以下令弾
給し由見日本記其後延喜の御時弾人生し欲
中古以来楽曲以後ゝ　仙笙　今おゝ　高家者　ゝ　又
白虎通曰琴之禁ゝ　禁止邪氣以正人心　ゝ

けんならうは源氏にはやミの町とはいひそのあれの祠よ
も御まの前かとくりうさ無かりとあゆり信紀君と
行かうちよにと吹かしと若みな欤
いのちもたらひし給ひんと

巴鼓琴 琴爲辞而鳴莫躍而遊 列子
琴書曰師曠晋之楽官也上於琴能易寒暑 風
雨晋平公鼓之 玄鶴六下辞

こゝろは何のさ物にやありん
後撰
忘ねと以しよるの君をまとはなには何さ物をそふる
いろふかく
今ふか色をわすれは何ばん人の泪をしらせん
ひとゝもよ 一様
ぐれもすみ 代もすや

花を訪ひけるもなきかな桜をみれはゆくかたを
かてふりけり 非跡
夜のあらし風もうちはやくと行り
後撰遠元良
散ましれをきてそみつつ桜花よもの風のうらやましさに
けふかくとしつみ給ひつさ御まとも何ことはりを御月とも
あやうとおやよ
花しつらはしてふきたりかり数書をもたくさす
お儀あり堀河院数書合にての行り
花なし大納言それとも匂ひよたくさしふく
年をまことにいとてくらかまれるの字をもつくりぬ
さらに 此の額師古曰果 千東半又王逸林芝辭注曰
夫をけさいふいまをはかる年齢也百と勝のはなし
義を五十行かうの名に一統をいは此や中さる

とかはやさしきとにはときたるや五月にはかりのは
ときくや菖蒲云　これはかたとききたる時
なきれるをへなとのきようのききたるまん
このことときてのちよりんて
先ておやとは一説にやめ日本やとし紫式部
目にとめてなり
せて御ことは　とたさ海の御詞や
なほさアかと　平生　蓮阿
ありける　白ちるへや
元はまさなふるとふかくもありさあまは
これ詞は常の人分といまさしまなと知しるやさにも
あるとは席よ粒波津浅香山の分ありて今の人々
くみおもしるといふ事やいろくれやをよ一字つ
かさていはさ此分とさよつけてとといふなりて
近事ませのみちらきなんみまりしといつる也

少納言のかたくいふ人あるしにあへしはり
まかなるを　船よ得帆　点帆といふ詞あるにまの
覚えしはいまかくさしけくらなるへなり
ことはおはゆる人かく作きくよしといつくるを
詞多不少
多北はちりぬらんみる海へさしかりき　蓮阿寄　使
数書やさしよいふよくまつもとよしてて一字つかきたる
なすの武統数　字といふ刻あり其名れ
西行法師ハ圓範近とらきけり美様説や
かきの山あきくしくにのみなふ山の井はけるらめるん
あさの山の影さへみゆる山の井のあさくは人をおもふものかは
くまあらくやしと云山の井はあさたのつや新古今
くやしくそくみそめけるあさけれは袖のみぬるる山の井の水

王命下ぬ　王氏の命ぬや又上古ハ王姓をし給ふも

續日本紀曰藤津王言少納言正五位上王也又奉日作請姓之表曰
男四人女四人淺義王姓以世言之ふ許　事詳爲与广　下集にて

ゆるしたまへらんといふもわろきにて

くらゐの山よ尾のはらからさうちをきこゆれと

とこ深くくらゐの山よりくもいたりらしくとゝめてゆり

奥入云趣く此分文ふ叶くらゐの山の事分たちたる

故元未勘出と

とこ栄ハ晴字よませく夜のとくはくへきなりや

密通　母事

則天皇后者初太宗皇帝之寵也後爲高宗皇帝

后光仁天皇后井上内親王通桓武后見國史

なさねよかくし給

上東門院　一条院御母后

あふくハねハなきさねの麦のくハ源氏ハみ女ハき

源氏の君とたらしくさねとゆるき藤なるハくに

らとゆかゆりてとゝ給ふいとよからおりてもねと化

のとよゆるらへき

なさハ女ハ光源氏天子の叙とぬ給へき也又その中

よたかめゆりくといた還乃事也

毛詩曰下莞上簟乃安斯寢乃寢乃占我夢吉
夢維何維熊維羆維虺維蛇大人占之維熊維羆
男子之祥維虺維蛇女子之祥　斯干篇
又曰占故老訊之占夢文選曰坪至感作占夢号乃
負吉之元府

この中ねあふさてくへよくさゆれと

水原抄曰夢惡夢ふ可語人とみふハ本文にのはやと

と紫は是穏密との之不及本文と詠給矣
はかなし小舟
（伊勢物語）おくつゆはそれがゆへのさかりなりしはぎもおもふらむ
みちのほとりにも
世をうきものとおもふへりなんよいはむ人もなくてぬれ
ゆめやうつつやはるかなり　色　花仙屋　云若同
まほろしきや　水原抄に末代の事なりと大和物語と
もとて揺れなくて袖まてもはなくさるか末摘花
よこさぬあやうさなりと老人のさくらさわのさくひとう
色しのまあやうなのまもとろしけるねとはり
はなゆふまつる船をあてなりね
あてなりぬらくなりぬやそよくしは詠や
ねすく人やと

みすと入のあてな小船にのりつたしねすらく人よやさえんにあ
（たと）のりはにくなりし小舟こき海の中し人や忘れてあかん
まほにてそはなにみてし紫式すまふりひとうある人のまな
はなるか紫式名の元娘やけしはきの名字え達さくよき人
せらいはまてし紫すり見や根よかひとうとい藤壺女御
のゆかりこそはなるの古しにも
紫式一のまのゆくしきしの草はみるはそれとそみ
このふるえや哉しきしのもいろはかこれねとしは歌人
露おもふる草なりゆかりとくにの様生ふても志をされは
いろともきれの出へよりあとものとれせなりとはり
皆一は紫式人の義や
六條内大臣　有房也　紫は文代官酒や佛のわぬすも紫
广令の称とかは物語中才一の美人なるか故なり

又此号外にもかくて侍るめる人かゝる歌
かきの御ことまいは　なさけの詞し　かゝりけるにや
にしきもうちみたれはうそらいとも
あしわらの道よこさよすら白浪の志らしも尤ゆるさずとは
なきころさるし
人志れぬわかれにつけしも見えとくるをしつる人をも頼ると見えて
伊行輝よいみなそ哉さらんとに奥のいふことをとをかり此一紙
ゆき　率　伊勢物語
わかきこいゆとれそろふ
男女ともに紫と号を年わかき僕と
うれしき御らふはきかしもうつさしきをよむ　おりしもは
偏愛　注　愛色　花仙屋　鶏凌ころうをきの人に見え　権丁宗　奥ニアリ
いもかとへ　妹と門

猿丸大夫集にあり　しける女の家の前を過ぐるとて
草ふかしとひく也とかけり
いかに門ゆきすぐるかねて草深く風吹きそふかにけらん日毎てよ
たちどまきうれけれどかくも聞こえきよう　注
女のまにさかりなりようにおけるきれて
秋の夜の草のとさしいわれもとおりぬれかたそのえ
いふことにつきてたちそ秋の夜の草のとさしにさむるやは
にほふまくとにもくひくちよい田ほそにくまてにふと
見ちらよい田ほとくれ毎れとかね山とゝ此てかしこ
おゆこさゆきる　風俗常陸方
にけりまは　わたれ地ふなれとも又東洞まで極曲なるや
常陸方風俗の極事に前の其一まの東洞かくとかく
まて此方とうらふと今世知人稀也とて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

源氏論義し釈り抗こそしの義は後義ようてれ
抗一り抗世ホ倫又ミ　和漢通　学通和漢ミ
かりひそめ人うくくりてすり　潜心
りの生ひのひそじよいかるへーそれ人屑ひそしりの心
潜抗といて潭底よ潜抗ようて潭底よ潜抗ようて　用易云潜抗勿用
何謂也子曰於德而隠ふやういるり
見性乃文ふくいりそくくりやうそけん
白氏文集小志三友
今日小宮下　自問何所為　欲抗得三友　三友者為雅
琴琴罷輙举酒　酒罷吟詩　三友　相引　脩環無已時
一弾琴中心　一詠暢吾支　猶恐中有間　酔詠継之
いり一くさは女なるまい詩の事欲仲行天よ酒いいり
もりいられるくそいのりの
所
いられのよりるくりよ今そくくりそくくりそ
ふくいき

ちさりけりなりうり　下まつなり
ふるくくとちさよ行つ久ふ
りりりりよりおりりり心とりの月はあがれといるりそ
いまあたくりけり　大内山大内のふり
たりこう　諫
初やうりりくのりりしつきをや春乃ふりしは日ふや
ふいりりりりりいりりりりり

しそをとたあまやとりて可たやとりて赤下裏紙
志て女仲さ　住吉の姉しの門
ろいの屋とまとまつていの行
あ仏寺姫同門や　横笛はしよみとら
かく金ろ　さとりなれ　ろらかやきとりの門や
寛平法皇大内御庄の時　仙洞と梅とられ
八月ろいとろ海くまろ月八分すとかさま
左近　さくよりてまはろ海ろ月八ろれいる
たとやとれ　あやとさとつ初よ文字ぬくくいつろ
や　実盛の説
長嶺　よ　まとろ　ひききてたなやとろ　ろ人なる
海苔ろい　氣　日本紀　歌謡　新撰亦紀
いないあ　ぬわく　いなまとろ

行ろちく　行よくしれ
さまくれ　されぬ
らはま　曲行べはまい　漬行ろ何人　人ろさしれ
みふ　日本し
ろいの　なつしく　衣被香又　裏被高　邑衣東宮
いくしい　ろ　ろまけ　物ふ　ろいそ　ろ
日本紀日　喉咽進退血吉懐　無所訴言　高仁天皇巻
又曰棲遑不知其所　日本紀
たなあ　ろ　ろの　襟　あろ　ろけしろ
ろとは　ろ　ろ　ろ　ろ世中　ろ海　ろ
あ山　ろ　池　ろ　ろ
ゆ　ろ　緩
ろ　ろ　ろ　粥
ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ

周書曰黄帝始烹穀為粥

東坡詩注曰粥則宮中道士食粥於早時也

のきはくもとりてとりたくさんはたくさん

源氏中將ゑ以中將車とつねおく同車せられしるるの

ひとくきれとりとりはけまいろ

ろのとくまとい文あの沖くまてるく光ゑ同車と

中さきれとちふく中央さきたるにはけまく

大のちつきはくちれ帝く　大策詠天八　雅信卿

長一天八寸　広四寸八分　律書圖云　大笛　策小ことと

又云天八為短笛　玄宗皇帝前身羅漢ゑ

好吹天八被憤出し云　高僧傳上

志かく

くさいくひ

試樂

膚

御食いとくはのもとれ　御髮極色

極文事令極文磯紫世言後氏有四越が燒進不

得はふ鹿角し故極文沿見法花蒙集越紫云

九枝風爲越寒冬集得千葉翠文末好向中

霄感　海代極中散閑遺杯乃知唐に有極文

非後氏為始　類説

し紫極文いる紫ゑ越州しらしてはけるは共文翠

まふくはとくれらり仍色と極義して長帝ゑ

ふ用しゑ故号極文ゑ

ケふくさのくはけれまはるはて

毛詩曰　退食月云　箋曰退食謂減食ゑ

暗はけとはまるとはるる

さはるとはけれくれさ

仮活賠女房櫛とさゝせ毎年義こゝに毎年ゆ
やうくなるしきりゆく
かゝ家〳〵　内義坊　主大宿
いとりかけまはるゆとりなく
荘子曰　寿則多辱
心〳〵ちりくゝるふとはりねるふわねい
世事はうとやさしく品〳〵
山ちゝ貧窮問答乃長ちゝ
ちるひとり夷　サナカヒメルヤ　万葉よ
又夷ア　夷放図ケとかゝり日本紀よい夷曲と申くゝる
ゆりとゝゆり
いさゝさんちとり　聽
ゆりいてゝ世くんゝちとゆゝ

活坊

ゆさかけくゝれと　衡黒
ぬゝんはゆさけの御ゆりゆゝ
普賢菩薩乗大白象鼻如紅蓮華色　観普賢経
いゝ言ゝゝくゝけ
サ青さいゆて白いとこゝあゆくゝゆゝ成ゆゝ成ゆゝ
ゆはゝれゝゝ晴ゝゝい額ゆゝりゆくゝゆゝ
ゆゝかいく　髄　荘子
かゝゆりゝゝゆゝゆくゝけゝ
かゝゝ傷心　さかりゝ四事心
ゆゝゝ文ゝゝりゝゝいゝゝゝ一ゝゝねゝいゝゝ
ゝゝきゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　聽文事　延喜式ニ　礼橘文
お紫不以為衣服ゝ論語よいゝゝ知ゝゝ文ゝ聽文
いゝ欲他このゆゝゝゝいゝゝ落ゝゝゝゝ

うちきい　や　有大小　男女共に武士は大小を
差さる事やうし
あらきれつ　ぎさ　鄙　鄙てんと　鄙　鄙てんと　鄙　鄙心　鄙心　鄙心　鄙心
杜詩云　李子黒鄙衣注曰　蘇李未用黒鄙衣　鄙衣　鄙衣　鄙衣
遊数歳大困而帰　兄弟嫂妹妻皆切笑し
又曰　鬼魔疑鶴髪　中亦鄙衣　鄙衣　鄙衣　鄙衣　鄙衣　鄙衣　鄙衣
奈　秋〻詩　貧家服よりけり
西文　就日陰　対祭舞人　帰路玉黒鄙皮衣
拾遺　曰中文　安子　あらきれかたきねと　高名侍人
横川よりすこし分けるよりしけり
文　なるはこのかたきね　風と　ふをん
ふさいの　必　所　中付
きしきくまんのうりいくらう　儀式官　古代

らそめにそ　ちらそめにそ　ちらそめにそ　ちらそめにそ　ちらそめにそ　上句未詳
松の雪　あらけなく
松新歳寒　いろり　雪雪　雪し　洞　ちい　松性　乃あ
くらの　故欲　又服　ふし　ふ　ふ　ふ　松　松　松
あらう　言いけ　くらき　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ
名　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ
我神　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ
ふ

悪霧を寒氣併入鼻中章　白氏文集

みちのくのよかりしかりあり

檀紙　法眼四方の檀紙

みちのくのまさごにまじりて檀いまは紅葉

けふのようにてこれおりかのようにいかなるうちにかくて

ゆいくるまの墨　後　衣笠　芳春　三見延喜式　古代

法絵平貝

神まれにけるしるしとなきものよ

にの人言はをいかなる白めて神まれにけるん人のあるよ　なきみよう

命ぬおりてにのうきて　化妝　漢法物

いかなるまりきとけるさみなるの

能色今様文　見延喜式　志ましはゆる文見

うるよりてゆるゆる文　刻ちすいとと板文

といふりえゆるとゆくくといゆる文よりてそ

まろ歌

ケゆしけうくひくくうこゆやの

表裏同色の法ハ色を用紙

なけるくしき文とたるよ行ふ

表　くそのみつや文紅の本つじ表ハ文よ　紙

人ちをもくくくくれたるつじ表文よりくはん

おれいとるつりさけてやそとるつじり

ちこ表ちるかくかる

くるの文　ようかたるとよりくくはうそ

おるくけつゆもはしく

なりくけつまるけいはきくうゆ

とはち　ようゆるとけるくはれ

[illegible]

大詩　延　皇文集　延如永　日知記

後撰

[illegible]

[illegible]

[illegible]

元氏行　　月卿

さぶらふ人、いとうつくしけれども、

撰業　唐更　撰上聞　撰賢の名長くとどまり物語

かの行ひしこと、ことのはもかきあつめられて　きてうらはさ

らとめ行ひしきよらにて

人かりそあやしくはなかりける

きねくりは源氏のとうきまてうきさねとさるべき匠

しうりうれしうも源氏の心ときはなりきね

ぬんのめ行ひしきよらにて心ときはなりて心ら

裏とは富士よりもすぐれたる心

まうけ物いさしけるまくに仍らはきつてうり

行ひ元年ちうるおもうの海ちうくひとの心

行ひけるまうけ

もうまる行ひけるまう物ちうるけるまう海ちうて物ちうて

美しきをおぼゆる

奥入　美しきをおぼゆる　伊行朱

新撰字鏡美ふ美

と栗ちうれくい美しきをうるはしきを

けさ行河ち　毒　天　お遠方

むしのさうのはちうけ

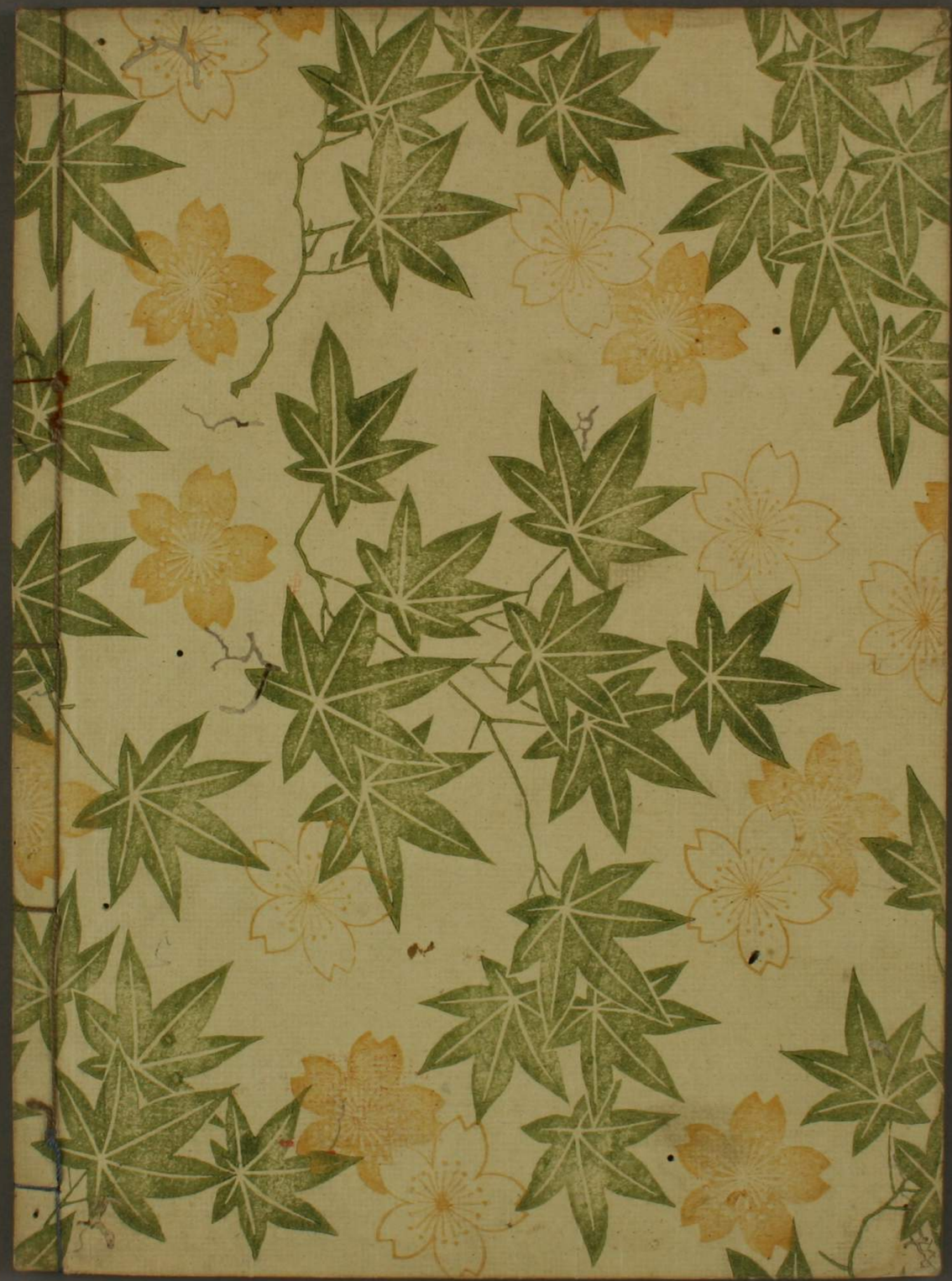
物文の右ちうく裏いこき　細長

きぬ女ちうの物ち

御ちうれうの物のようちうくよかりとうて　その心

ちうの物ちうるまうしうる

宇治大納言物語ニ平仲ハ女ちうふゆうて

まねうて硯のうへとうちうて

なりとて女房えて是成とりて入てなりとし
らせて入めしそれ人女うみと見せくらもり
れはこそ行さい者ものみとまてもとへまてはくら
のうきよ大和物語しも世事行人
けうらんいあへなし　とあり今しこれ
いとおもしきふもせてみくら
いませいふもうせうせ伊勢語伊勢冊子
見者うもて支ぬとして
せといぬし
じうはうきくかりはくふみくまて
ふうねとりうこ梅代記とそ我ありとれりて